

長崎街道物語(1) ちくほう玄風 1号 (1993年6月5日)

3月20日「像の歩いた飯塚の宿を歩こう」
5月23日「長崎街道散策会」という2つの催しが飯塚市を中心に約百人の参加者を集めて行われた。

長崎街道とは、江戸時代整備された日本の道の一つで、小倉から長崎の間57里(約288km)の道で、「日本のシルクロード」とも呼ばれている。シルクロードは本来中国での仏教伝来・文化交流の道ということであるが、徳川幕府の鎖国政策によって外国との交流・往来が閉ざされた日本で長崎だけが外国に窓を開き外国船の入港・交易が認められ西洋の文物や学問に接することができる所で、多くの学徒が青雲の志を抱いてこの道を往来し、また西洋の人達や動

物・文物も通った。それも、文化の道として「シルクロード」と呼ばれるのだが、今この道を「近代日本夜明けの道」としても位置付けたい。

青雲の志を抱いた学徒たちは長崎で西洋の文物や学問に接する中で、ただ学問に留まらず鎖国による日本の遅れに気付く。この人達は又、中国で起こったアヘン戦争や西欧諸国のアジア植民地化政策にも気付き、徳川幕府の政策・制度に批判の目を向け始め、討幕運動の原動力となり徳川幕府を倒して近大日本を作り上げた。

この学徒の往来の道が長崎街道であり、日本の歴史における役割は大きく「近代日本夜明けの道」と位置付けてよいであろう。

長崎街道物語(2) ちくほう玄風 2号 (1993年7月5日)

筑前六宿(飯塚宿①)

「筑前六宿」とは筑前藩内に設けられた宿駅六つを指すもので、黒崎・木屋瀬・飯塚・山家・原田がそれに当たる。

この中の飯塚宿は現在の飯塚市街地に当たり、町中を旧街道が通るため、今も地名や遺構が残り、私たちが見聞する機会も多い。

まず、徳前大橋から「向町」に入る。向町という町名は客を迎える町と言うことから、迎え町が向町になったと言われ、この通りの「関屋駐車場」も町の入口に関があったことを伝える名前であろう。

この通りを抜け右折すると、「徳前」。ここはかつて徳米(=年貢米)を納める蔵があった所で、徳米を納めた蔵の前の町というところから、徳前の町名ができたと言わ

れる。

東町入口で左折すると公設市場の前、かつて飯塚川が流れてた「白水橋」。

橋を過ぎて本町通り・有田屋陶器店を左折すると明正寺の門前に「勢屯(せいだまり)」と刻まれた石碑に出会う。明正寺の奥(今の公民館)が宿場時代の本陣跡で参勤交代の西国大名が宿泊した。行列の一行は町に分宿し、出発の時にこの勢屯で隊列を組んだという。この寺の過去帳には「幕府献上物として南蛮渡来の象通る」(享保14年・1729年)と言った記録も残されている。

(つづく)

長崎街道物語(3) ちくほう玄風 3号 (1993年8月5日)

筑前六宿(飯塚宿②)

飯塚市本町は、江戸時代の長崎街道が、商店街に装いを变えているが、そのままに残っている。

まず、白水橋を渡って本町通りに入るとダイマルがあり、店先にうずたかく積まれた商品の間を一寸覗くと恵比寿の碑がある。飯塚の商人が商売繁盛を祈ってたてたもので、現在は納祖八幡宮に祀られている。このダイマルの前には恵比寿通りの地名が残っている。

福岡銀行の前・中ノ茶屋通りをすぎたひよこの店の前には問屋場の碑が建ち、さらにこの奥・NTTの所を馬立と呼ぶ。問屋場・馬立は、江戸時代の流通センターで、遠賀川を川船で運ばれた荷物がこの地で集積され馬の背で嘉麻・穂波の各地に運ばれ

ていった。

この通りのアーケードを抜け納祖八幡の前を通り、宮の下を少し西町に向かうと一本の石柱が立っている。この石柱は遠賀川を上下した川船(五平田舟)をつないだ船もやいの石とも説明が付けられている。

飯塚宿は長崎街道の宿場町であると共に、嘉麻・穂波の商業の中心地であり、遠賀川を上下した五平田舟の水上運輸・荷物の集積地としての陸上運輸の中心街でもあった。問屋場・馬立・船のもやい石等は商業の街の歴史を伝える遺産ともいえる。これも飯塚宿の特徴である。

長崎街道物語(4) ちくほう玄風 4号 (1993年9月5日)

筑前六宿(飯塚宿③)

飯塚市本町通りを抜けると宮の下に差しかかる。納祖八幡宮下で「宝月楼」という石碑を右側に見るが、この石碑の前に立って「飯塚の宿ちゃ大変な宿やな。お宮の下まで、遊郭があったとやね。」と呟いた人がある。「宝月楼」の楼を遊郭と読み、かつての坂の上の遊郭の一端を連想しての呟きであろう。しかしこの「宝月楼」は学園都市飯塚の先駆けをなす石碑と見るべきである。

この「宝月楼」は飯塚宿の豪商樽屋古川氏所有の寮であり、幕末の歌人・大隈言通を招いて飯塚宿の商人達が、歌を作り文学を論じた建物である。

大隈言通は、福岡藩の歌人であり、博多から八木山峠を越えて飯塚へ来た。ただの来訪でなく、何日も飯塚に逗留して飯塚の人達と歌を詠んだ「集中講義」である。幕末の女性歌人として有名な野村望東尼は、師・言通の帰りが遅いのでわざわざ八木山を超えて、迎えに飯塚の宿まで来ている。

飯塚と言えば石炭産業と共に無文化の土地と思われているが、この大隈言通の例でもわかるように飯塚宿の町人は、歌をたしなみ、文化を愛したと言えよう。「宝月楼」はこの記念碑である。経済力と文化の結合を垣間見る記念碑と見てよいだろう。

長崎街道物語(5) ちくほう玄風 5号 (1993年10月5日)

筑前六宿(飯塚宿④)

飯塚市宮町納祖八幡宮に足を止めると、石段に「博役改小林文吉」と台座に刻まれたコマ犬が見られる。対になったコマ犬には「倅伝吉」の名前も見られる。この小林家は、納祖八幡先のオランダ屋敷の隣にあり、異人宿の警護も彼の役の一つであったようである。現在も小林家には長崎街道を通った「異人さん」の伝承が語り継がれており、異国文化に接した当時の飯塚宿の模様を垣間見ることができる。

オランダ屋敷に異人さんが泊まる時は宿の前にたくさんの子供が群がった。葉巻をくゆらした異人さんの煙草の香りに集まったという。宿にいる時この葉巻が捨てられ

ると、子供たちが一斉に群がり、手に入れた子は意気揚々と家に持ち帰り、親に渡したという。

また、異人さんが宿に泊まると鶏の調達の依頼があり、調理された料理の一部が下げ渡されたそうだ。江戸時代日本では、宗教上の理由等から肉食を避けていて町の人には馴染めなかったが、小林家では美味しく賞味したと云う。

この宿の通りには飯塚川の川船頭の長屋があり、雨や増水その他で仕事のない時は丁半博打で大変であった。博役改役の小林文吉の仕事はこの長屋の治安維持でもあったという。

長崎街道物語(6) ちくほう玄風 6号 (1993年11月5日)

筑前六宿(飯塚宿⑤)

幕府献上物として南蛮渡来の象通る一飯塚市明正寺過去帳。この記録は、享保14年(1729)3月20日の貴重な記録。

この南蛮象は、徳川8代将軍吉宗に、中国の商人鄭大威が、貿易の便を願って献上したもので、7才の牡象だったと言われる。

享保13年、長崎港へ入港直ちに陸揚げ。と言ってもクレーンも何もない時代。4日間かけて特設の橋を作り上陸させたと言われる。上陸後も江戸までの輸送法に陸路を取るか海路を進むかで大モメ。最終的に陸路に決定された。一口に陸路と言っても大変。川もあれば峠越えもある。象は宰領・象使い・通記等14人の人間を引き連れて

長崎街道を江戸に向かう。3月13日、長崎を出発。筑前六宿での足跡をたどると、18日山家～20日飯塚～21日木屋瀬～22日黒崎。この後、小倉藩へ入り23日小倉、25日大里(門司)へと進む。石畳の冷水峠を踏破し、異常寒波の木屋瀬では石炭を焚いて暖を取り、大里では船の手配で4日間も逗留するなど様々な難行があった。

江戸へ到着したのは5月25日。この間354里。記録の最後には悲しい結末が残されている。象は21歳で江戸にて死亡。死因は食糧不足と寒さによる凍餓死と言われている。

長崎街道物語(7) ちくほう玄風 7号 (1993年12月5日)

筑前六宿(内野宿①)

筑豊での筑前六宿は、飯塚・内野の2宿である。飯塚は明治以降商業都市として大きく変貌したが、内野宿は古いたたずまいを残し、里の宿場町の雰囲気を感じて現在にたっている。この内野宿に足を向けてみよう。

冷水峠。この峠は長崎街道最大の難所であり、旅人も難渋したのである。「冷水」という名前自体寒々としたもので、追いはぎの伝説「首なし地蔵」なども語り伝えられている。前回の象や大名行列もこの峠を越えた。オランダ医師シーボルトの旅の記録の中にも冷水峠に関する記述が見られる。興味深い話も数多くあるが「馬の靴」の記述も注目したい。『日本の馬は峠の石畳の雨

に濡れた石を楽に荷物を背負って歩く。西欧では石畳に滑って歩行が困難だ。馬蹄が滑りやすいのだろう。日本の馬には藁の靴を履かせる。この「靴」はとても良く、馬は楽に歩行できる』という記述だ。いわゆる馬の草履というものであろう。

大根地の峠から、石畳を歩いて内野に下ってくると竹林を通る。この竹林は京都嵯峨野の竹林の風情に似てとても美しい。ただ最近はこの道にトタン等で作られた囲いが見られる。大根地山や三郡山の猪が、この竹林のタケノコや田畑の作物を荒らすため、里人の防衛施設であろう。

長崎街道物語(8) ちくほう玄風 8号 (1994年1月5日)

筑前六宿(内野宿②)

長崎街道の面影を残す石畳を歩き、首なし地蔵の横の小川で喉を潤し京嵯峨野の雰囲気のある竹林を過ぎ、荒れ田の民家から坂を下ると大根地神社の鳥居から国道に出る。冷水峠を無事越えて内野の宿に入ったことになる。

国道からビニールハウス横を斜めに左折し内野への道に入ると「はぁこれが長崎街道」という声が出る。車一台の道。道と田の畔の間には美しい小川が一本流れている。本当に細い道である。この道を大名の籠が通り、シーボルト等紅毛人の隊列・将軍献上の象・商人・芸人等が通った。細い、しかし近代日本を招来した夜明けの道である。

この人たちを迎えた内野宿には、構口も

本陣も残っていないが、先ず上方へ向かう旅人達を迎えたのは関屋入口の小さな祠堂であろう。涅槃像＝寝仏さんがまつられた祠堂が道の脇にある。旅人達は香を手向け安全を祈願したであろう。

関屋の地名を宿の入り口として街に入ると江戸時代からの家が並び、肥前屋・長崎屋・小倉屋・薩摩屋等の家が並んでいる。長崎屋の壁には明治初期の内野の街図が案内板として貼付されている。長崎屋の前の白壁土蔵作りの家が小倉屋。薩摩屋には現在農協が建っているのがわかる。

長崎街道物語(9) ちくほう玄風 9号 (1994年2月5日)

筑前六宿(内野宿③)

長崎街道は内野宿の中央部で三差路となり、江戸に向かう長崎街道と太宰府天満宮に向かう参宮道との分岐点になっている。現在のJA 筑穂の前がこの三差路でここには「太宰府天満宮米山越道」「願主当駅栄梅講中」と刻まれた石柱と恵比寿神の石像が追分石として建てられている。

恵比寿像は商売繁盛の神として商店や宿場町に祭られている神で肥前の各地や築後にも良く見られ、山家の宿や太宰府の街でもしばしば見ることができる。

太宰府天満宮は学問の神として信仰を集めているが、昔は天神=天の神として豊作祈願の信仰を集め、筑豊の農村からの参詣も

多かった。また、幕末の思想家・吉田松陰もこの石像や道標に導かれてこの内野宿から米山を超えて太宰府天満宮に参ったようだ。

この三差路の奥に、内野田老左衛門の墓がある。この太郎左衛門は秋月藩の命を受け冷水峠を開通させた長崎街道の恩人の一人であり、宗賢寺に静かに眠っている。

近くの内野駅前には将軍にも献上されたと言われる内野葛の荒巻家があり、その由緒を伝える看板も残っている。

太郎左衛門は肥前唐津の出身と言われ、宿場内を流れる小川に「松浦川」という故郷の名がつけられている

長崎街道物語(10) ちくほう玄風 10号 (1994年3月5日)

ちよつと寄り道

元長崎街道の飯塚市本町通り。かつて数多く往来した大名や旅人達。その面影や遺跡をこの通りに見出すことも多いが、その賑わいを現在に伝え、さらに未来へとつなごうとする施設が昨年11月に誕生した。

「本町中茶屋コミュニティセンター」。ここは街の飛翔を願う熱い想いの中から生まれた21世紀飯塚の新しい「本陣」である。

まず、入口の大きな時計に注目しよう。朝10時から夕方6時まで、正時になると美しい音楽に乗ってカラクリが動き始める。時計が二つに割れたかと思うと、江戸時代にタイムスリップしたかのような飯塚宿のイメージボードが現れる。毛槍の奴・武士・

大名駕籠、紅毛の異人やラクダの一行が街道を歩いて行く。その頭上では「将軍献上の南蛮象」が動いている。本当に楽しいカラクリ仕掛けだ。

2階に上がると、左壁面の飯塚宿レリーフと共に、3つの大きな水槽が配置されている。美しく可愛らしい魚が泳いでいるが熱帯魚ではない。遠賀川や筑豊各地の湖沼に生息している魚達だ。「こんなに綺麗な魚が本当にいるの」と眩きたくなる。

カウンターには通行手形が用意され自由に頂戴できる。街中では見つけにくい休憩所・化粧室も完備されていて「ちよつと一休み」には最適の場所だ

長崎街道物語(11) ちくほう玄風 11号 (1994年4月5日)

ちよつと寄り道②

3月17日、「日帰り長崎街道を歩く会」の中心メンバーと嘉穂郡桂川町から飯塚市本町を通り鯉田まで約14kmを歩いた。コースを歩いて気付いたのは、長崎街道が土地に根付いていないことだ。近代夜明けの道と呼んでよい程日本の文化にとっては大切な道なのにまず案内板や解説の施設が全然見られない。

桂川と穂波の境に一里塚があったと記録には残っている。「瀬戸川を徒ち渡りて、岨(大将陣山を指す)を右にし田を左にゆく左秋月街道・右肥前海道という石表あり一里塚あり 左右とも松なり 人家ながくたてつつけたるを天道という。」文化2年

(1805)太田南畝の記録である。しかしこの一里塚は残っていない。研究家の踏査でやっと跡地がわかった。

楽市小学校の校門の前に「昔 長崎街道 / 今 あいさつ街道」と刻まれた石碑が唯一のものと言えよう。飯塚市内には文化連合会で飯塚宿の記念碑が建っているが、行政からの取り組みは見られない。先日、飯塚市昭和通りを「長崎街道～」とゼッケンをつけた1グループが歩いているのに出会い、「本町通りが街道筋ですよ」と要らぬお節介をしたことがある。各市町村の行政や観光担当で、案内板・解説版建立取り組みをお願いしたい。

長崎街道物語(12) ちくほう玄風 12号 (1994年5月5日)

ちよつと寄り道③

「菜の花桜ウォーク」と銘打たれた長崎街道を歩く会が約50名の参加者を得て4月3日、直方市岩鼻から北九州市木屋瀬まで約8kmの行程で行われた。

案内役担当の直方郷土史研究会の佐々木務・牛嶋英俊の両氏に解説をして頂く。

直方は江戸時代「東蓮寺」という藩の城下町で、当時長崎街道は通っていなかった。城下町に街道を通すのを防衛上嫌ったためである。所が東蓮寺藩は福岡・黒田藩に統合。藩は消滅し、武士集団の福岡移転によって街はさびれる。城下町から商人の町に代わった直方は、再興を願う町衆や庄屋によって岩鼻に切り通しが作られ、長崎街道

の新しい道筋となり旅人が町に通うようになった。

このような説明を聞きながら「そげん歴史のあったと。」「武士の町やったき『殿町』ち言うことやね。」などの声が出る。まさしく「百聞は一見にしかず」。我が足で歩き、目で見ると事によって、歴史が身に馴染んでゆくを感じる。改めてフィールドワークの重要性を感じた一日であった。

「日帰り長崎街道を歩く会」が毎月一回、下記の予定で計画されております。

6/5 勝野～木屋瀬 7/3 植木～黒崎

8/7 黒崎～小倉

あなたも参加してみませんか？

長崎街道物語(13) ちくほう玄風 13号 (1994年6月5日)

街道を東へ①

街道の旅をちょっと寄り道していたが、三里に灸を据えて出発、街道を東に向かう。

飯塚市宮の下のオランダ屋敷跡から片島へ足を進めると、片島四つ角交差点付近で街道は右側の家並の下に食い込まれている。四つ角を抜けて直進、竹園寺の前を通ると左側に林田家がたつ。味噌・醤油醸造の恵比寿屋・大黒屋の本家である。屋根に鬼瓦ならぬ、福々しい大黒さんの瓦が乗っている。

ここらあたりから街道は住宅の下になり、PL教団より建花寺川を渡るあたりは、街道は全く消滅している。対岸住宅地を抜け幸袋へ出る。池田公民館前より高林寺を右折、

許斐神社へ出る。幸袋町誌に「長崎街道は新町を通り郵便局から右折、本町通りをへて遠賀川沿いに街道があった。このあたりは松の並木が続き壮観な眺めであったらしいが、今はその跡形もない。」と記されている。この郵便局横の民家を見上げると、壮大な民画の鰻絵を見ることができる。左官職人が鰻で練り上げた絵だ。その通りの左側に石炭王・伊藤伝右衛門の豪邸があり、それを過ぎて遠賀川の堤防に出る。

古地図や街道研究家の松尾昌英氏の研究によると、ここから鯉田大橋近くまでは現在の遠賀川の河川敷を街道は通っていたようだ。

長崎街道物語(14) ちくほう玄風 14号 (1994年7月5日)

またまた小休止

長崎街道の旅、道草が目立ちなかなか小倉常盤橋にゴールインしないが、今回もちょっと小休止。

「長崎街道を将軍献上の象、通る」これは飯塚市明正寺の過去帳に記載された享保14年(1729年)に8代将軍吉宗に献上された、南蛮象の貴重な記録である。7月29日の直方郷土史研究会総会の席で、新しく発見された記録のコピーが提示報告された。「享保14年酉年3月象、長崎より江戸へ登る」と記された下境の文書である。飯塚市歴史資料館の歴史講座で象の話聞いた吉村二郎氏が手元の古文書資料の中に象の記録があるのを思い出して発見に至った。

この像についてはいろんな逸話がある。木屋瀬では寒さが厳しく石炭を焚いて暖を取らしたという報告もある。が、地元・木屋瀬では後の大火で資料・記録が消失し、この史実は確認できていない。また以前「この象にリンゴを食べさせたと言うが本当か」という質問を受けたこともある。リンゴは明治時代にアメリカから入ってきたと言うのが定説である。享保時代の伝承としては少々不自然であるが、「もし本当なら歴史が変わる？」など思うと楽しくなる。この象については伝承や記録を今後も少しずつ訪ねて行きたい。

長崎街道物語(15) ちくほう玄風 15号 (1994年8月5日)

八大竜王雨降らせたまえ

異常気象の今年は、各地で農業用水の不足・給水制限等、16年前の「福岡水飢饉」の記憶を蘇らせる。

「水は天からの貰い水」であるが、このような干天は生活や生産を大きく左右し歴史の中で記録されていく。こんな水飢饉の時、人々は「雨乞い」をし降雨を祈願した。

飯塚市八木山地区の竜王山には、水の神・竜神が祭られ穂波地区一帯の信仰を集めている。里人は雨乞いの行為として、山頂にワラ千束を担ぎあげ、これを燃やし太鼓を叩いて雨を祈ったという。また、「神様が女の裸を見て喜んで雨を降らしんしゃる」と女性が裸体で相撲を取ったといわれる。その他にも「ワラで竜神を作り八木山

中を担ぎ回り最後に八木山川に投げ込んだ」とか「豊前まで水の種をもらいに行った」とも伝えられている。

桂川町土師地区の人たちは、ぼた餅を作り弁天様に餡を塗りつけた。「『体が汚れている』と弁天様が雨を降らさっしゃる」とか。嘉麻峠のつぶろ淵では「小便をかけると竜神様が怒って雨を降らせる」と、里人が砲列を整えて一斉放水をしたと言われる。

文明が進んでも、お天道様のご機嫌一つで人々の暮らしは大きく揺れ動く。水が豊かな長崎街道沿いも例外でない。

長崎街道物語(16) ちくほう玄風 16号 (1994年9月5日)

続・八大竜王雨降らせたまえ

未曾有の渇水で行政の水対策も深刻化し、家庭でも節水から断水へ移る中、雨を待ちわびる昨今である。

私たちの先祖はこういう水不足を雨乞いで対処してきた。明治6年の筑前竹槍一揆も、嘉徳郡庄内町高倉日吉神社に雨乞いに集まった上嘉徳の人たちが発端となっている。「苦しい時の神頼み」というが、必死の祈りである。

この祈り＝雨乞いが7月23日、嘉徳郡桂川町土師弁財天神社で、土師水利組合の人たちにより行われた。前号で紹介した「弁財天は雨の神様で、水不足の時に雨が降るようにお願いしながら、体にボタ餅を塗っ

て外に転がすと、『体が汚れた』と汚れを落とすため雨を降らされる」という言い伝えによる。

夕刻、弁財天神社に人々が集まる。田の水当て見回り終わった組合長さんを中心に祈願の祭典が行われる。神楽笛の演奏も祝詞の奏上もないが、拍手が鳴り「弁天さん。雨降らしちゃんない。」声が響く。祈りに次いで代表が御神体にボタ餅を塗り、お神酒も注がれ直食（なおらい）になった。祈りの宴だ。

雨乞いの効果やいかに？27日の雨や最近のパラツキは何処かの里の祈りが通じた証拠かもしれない。

長崎街道物語(17) ちくほう玄風 17号 (1994年10月5日)

久し振りの街道を東へ②

小竹から木屋瀬へのルートは二通り記録されている。

元禄5年(1692年)ドイツ人ケンペルは、2回目の江戸参府紀行の中で飯塚～直方間の長崎街道にふれている。「5月5日、我等は寅の刻(朝の4時)と云ふに松明を焚きて出発。更に一刻にしてコータキ(小竹)村につき之より川を渡りてアカシ(赤池)村に着く。又川一つ超えて半刻にしてナカイ(境)村に。次にノガタ(直方)とて筑前公の子イシ(伊
当時の大庄屋・庄野与四右衛門はこの急激な疲弊を憂い、直方を城下町から宿場町へと転換させることで町の活性化を図ろう

勢)の居住地にして、他の王侯の住地に見るが如き高塔なき所(の脇)を過ぎる。これよりクヤノセ(木屋瀬)の大村二至りぬ。」

当時、直方には東蓮寺と呼ばれる藩があり、城下町は保安上の理由等から旅人の通行を禁じていた。しかし享保5年(1720年)事情が変わる。主家に当たる福岡藩・黒田家の後継に絡み、東蓮寺藩が吸収。直方の武士集団は福岡に移転。城下町として栄えた直方は一気に寂れる。

と企画。様々な苦労を経て岩鼻に切通しを作り、直方に通じる新ルートを開通させる。

長崎街道物語(18) ちくほう玄風 18号 (1994年11月5日)

街道を東へ③

岩鼻で直方に入ると街道は、新町・殿町・古町と通り、現在の商店街のアーケードを潜って津田町・外町そして頓野口渡し(日の出橋付近)より対岸へ渡る。

旅人はここから木屋瀬へ向かうが、現在河川工事で街道は消えている。河川敷を歩いてみる。筑豊電鉄感田駅近くの阿高宮の昇り口には洪水を防ぐ小門の石柱が残っている。しばらく行くと北部配水線のところに六本松一里塚がある。「長崎街道を歩く会」の人たちで小さな一里塚の標柱が建てられている。さらにその先洪水から村を救った瓜生長作の碑が堤防の上に見られる。河川敷を進むうちに中島橋が見え堤防にの

ぼりコンクリ工場の前に出る。

ここから木屋瀬の町に入ることになるが、「従是右赤間道 左飯塚道 元文三年」(1738)の追分道標(複製)を見る。実物は破損され木屋瀬資料館に移されている。道標の前には宿場入口の構口の石済みが残っている。赤間道を行くと旅の安全を祈る輿玉神社がある。構口から通りを進むと愛宕山護国院があり、ここに木屋瀬祝の宿場図絵馬が奉納されている。さらに進むと現在天理教の建物が建っている場所につく。本陣のあった場所だ。ここから右へ折れると矢止めの家並が続き黒崎に向かうことになる。黒崎側の構口は不明のようだ。

長崎街道物語(19) ちくほう玄風 19号 (1994年12月5日)

街道を東へ④

木屋瀬から黒崎へ、長崎街道は北九州市を通ることになる。明治以降の近代化で、古い街道は点でしか辿れない。九州自動車道の下を通り、眞名子橋へ。ここの袂に郡境石があったといわれる。眞名子では饅頭石と呼ぶ鉱物が出土する。八万年前阿蘇山の大噴火の時降った大量の灰が、地下水の作用で元よりあった黒い物質を包み込んだ物。ちょうどアンコを抱えた饅頭のようになっている。眞名子より400m程歩いて馬場山茶屋の一里塚。さらに秀吉の朝鮮出兵のおり徳川家康がしばらく滞在した大日堂、麻生氏の菩提寺・香徳寺と過ぎ石坂に着く。名の通り岩盤の急坂で、大名の駕籠から下

りて徒歩で坂を上ったという。坂の途中で清水が湧き出しており旅人も喉を潤したであろう。

坂を上り詰めると銀杏屋敷と呼ばれる清水邸。ここはお駕籠立場もあった。この先、町上津へ入る。ここに蛭子神社があり「幸上尊天」の碑がある。早天のとき荒縄で縛り川に投げ込むと雨が降るといわれる。

国道200号線を進むと、涼天満宮。菅原道真公が太宰府へ流された時、この地で休憩し松を植えたと伝えられ、旅人や村人がこの木陰で涼を取った。

ここから曲里の松並木に入る。幸の神一里塚・西構口跡・岡田宮へと続く。

長崎街道物語(20) ちくほう玄風 20号 (1995年1月5日)

街道を東へ⑤

曲里の松並木を過ぎ、街道はやがて黒崎の宿に入る。長崎街道は小倉常盤橋を起点とし25の宿を連ねるが、この黒崎宿は最初の宿。筑前六宿もここから数える。松並木から乱橋へ。西構口は黒崎駅前の道路に面し、奥に岡田宮がある。江戸期の俳諧師の句碑が林立している。

熊手の商店街に入ると興玉神社。道や旅の安全を祈り商店街の守護神として信仰を集めている。ここから商店街を進むと代官所・郡屋敷跡、次いで人馬継所跡を通る。旧黒崎宿の中心地といった所か。ここで左折し、桜屋に当たる。幕末、当主は熱心な勤皇派であり薩摩屋として本陣を務め、後の肥前・肥後の本陣ともなり、三条実美卿

も上宿した旧跡。現在はマンションに改築されている。

鹿児島本線を越すと御茶屋跡として東構口に出る。この北側はかつての黒崎城跡。近くに秋月の藩屋敷や五卿上陸地がある。

陣山からスペースワールドの敷地内を抜け、一里塚跡から豊山八幡宮。そして菅原道真が太宰府へ左遷の折、姿見をされたという影身の池に続く。ここから清水町へ。

「従是西筑前国」の国境碑を通り、清水の水かけ地蔵へ出る。もう小倉は目前。小倉城到津口跡へ出る。

長崎街道物語(21) ちくほう玄風 21号 (1995年2月5日)

街道を東へ⑥

長崎街道は、豊前藩小倉常盤橋が起点であり、「お江戸日本橋七つ立ち」のように、小倉常盤橋から長崎街道の旅が始まったようだ。

「街道を東へ」のこのシリーズも筑前黒崎を抜け到津口へ差しかかる。ここはもう豊前の領内である。

黒崎を出て金田へ入り、福岡地方検察庁や地方裁判所を通り、田町・堅町を通るが、ここらには藩政時代五つの門があったといわれる。この道筋の右側に藩校思永館跡があり、慶應2年小倉城自焼の折、豊津に移り育徳館と称されている。東側にNHKや小倉城を見て道は大門一丁目に進む。ここにある安国寺は南北朝時代の戦死者供養の

寺であり、足利氏によって建立されている。この道から室町に入る。室町は藩政時代の小倉の中心地であり、物品流通から職人居住の町であった。この室町と対岸の京町を結ぶのが、長崎街道の起点とされている常盤橋である。橋板十六文三尺、幅三丈七尺といわれる木製の美しい太鼓橋だったといわれる。

木⇒石⇒コンクリート、さらに街の状態に合わせて拡張 etc..年次改築されてきた常盤橋だが、平成に入って「室町まちおこしの会」で昔の太鼓橋復元運動が進められ、五月には完成の予定。盛大な渡り初めの式が準備されている。

長崎街道物語(22) ちくほう玄風 22号 (1995年3月5日)

旅の終わりに①

長崎街道の旅も終点・常盤橋までたどり着いた。四月には平成の常盤橋の渡初式の報告もできよう。ここで愚感一文。

以前に、飯塚市昭和通りを歩いていた「長崎街道を歩く～」とのグループに、「街道は本町通りですよ」と、いらぬお節介を焼いた話をした。この間違いはどこで起こったのか。一つには案内板の不足が原因だ。

「長崎街道筑前六宿」というが、この道を嘉飯山の自治体はどう位置付けているのだろうか。

原田に石柱、内野はふるさと創生会の手で、桂川と穂波には見当たらず、飯塚市ではかつて文化連合会が建てた石柱・嘉飯

山ではこんなものだろうか。小竹に入ると郷土研究会と教育委員会が説明板を立てているし、北九州には木屋瀬をはじめ説明板が点在している。

本当に案内板が欲しい。近代日本の夜明けの道・長崎街道は、嘉飯山にとっての文化遺産だろう。昭和通りの混乱は、嘉飯山の混乱を示すものである。予算がない・場所がないという言葉も返ってくるだろうが、そんな大げさなものでもなくても良い。西鉄やJRに居力を仰ぎ、バス停や駅舎を利用させてもらうことだってできるはず。

時、折しも予算編成の時期。英断や衆知の結集をお願いしたい。

長崎街道物語(最終回) ちくほう玄風 23号 (1995年4月5日)

旅の終わりに②

『長崎街道を歩く集い』では一昨年四月より冷水峠の国道200号線開通以来通行不能となっておりました長崎街道を整備しております。昨年末ようやく完了致しましたので、今回この街道を標示する長崎街道の標柱設置と沿道に記念植樹を致すことを計画致しました。既に私有地においては標柱を設置した場所もあります。

今回貴所の所有地に長崎街道標柱設置および植樹を致したく思いますので何卒ご許可下さいますようお願い申し上げます。

長崎街道を歩く集い

福岡県那珂土木事務所殿

* * * * *

このような書類が、土木事務所に提出され、好意ある回答を受け取ることができた。長崎街道に記念の標柱がほんの少しだけ立ち並ぶことになった。

4月23日には北九州市室町に木製の橋が開通することになっている。長崎街道を歩く集いでは、この日黒崎駅から歩いてこの記念行事に参加したいと計画している。

長崎街道を愛する市民の努力によって「近代日本夜明けの道」のモニュメントが2つ、四月に誕生することになった。少しづつ故郷を見つめる目が増えつつあるのだ。やがては筑前六宿にも、我が町にも……。夢は果てしなく続く。(おわり)

*この連載は中島忠雄広報担当理事が担当しました。